



# 東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

大学と連携した特別支援学校の「進路」の授業実践についての考察：  
東京学芸大学での「一日大学生」体験(個人研究・共同研究)

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2009-02-19<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 小泉, 浩一, 矢間, 直世, 石津, みどり, 尾高, 邦生, 奥住, 秀之, 伊藤, 友彦<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/2309/90375">http://hdl.handle.net/2309/90375</a>  |

# 大学と連携した特別支援学校の「進路」の授業実践についての考察

— 東京学芸大学での「一日大学生」体験 —

|                |         |
|----------------|---------|
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 小 泉 浩 一 |
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 矢 間 直 世 |
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 石 津 みどり |
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 尾 高 邦 生 |
| 東京学芸大学特別支援科学講座 | 奥 住 秀 之 |
| 東京学芸大学特別支援科学講座 | 伊 藤 友 彦 |

## 目 次

|                      |     |
|----------------------|-----|
| 1. はじめに（研究の目的） ..... | 164 |
| 2. 研究の方法と結果 .....    | 164 |
| 3. 考 察 .....         | 169 |
| 4. まとめと今後の課題 .....   | 170 |
| 5. 補 論 .....         | 171 |
| 6. 参考文献 .....        | 172 |

# 大学と連携した特別支援学校の「進路」の授業実践についての考察

— 東京学芸大学での「一日大学生」体験 —

|                |         |
|----------------|---------|
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 小 泉 浩 一 |
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 矢 間 直 世 |
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 石 津 みどり |
| 東京学芸大学附属特別支援学校 | 尾 高 邦 生 |
| 東京学芸大学特別支援科学講座 | 奥 住 秀 之 |
| 東京学芸大学特別支援科学講座 | 伊 藤 友 彦 |

## 1. はじめに

特別支援学校を卒業した知的障害者は企業就労、福祉就労、訓練校による進学などの進路をとり、進路先や卒業後の生活に向けた進路指導が行われる。

本学特別支援学校高等部の進路指導は、生徒自身の学習という視点から「進路学習」の名称で呼び、生徒が、自分の可能性や適性を発見し、自分なりの生き方を探して選択・決定できること、また、卒業後の生活に対し自分なりの夢を持ち、生き方の幅を広げられることをめざしている。

教育課程では、①年齢に相応しい社会経験の拡大 ②選び・考える活動 ③職業的生活の準備と進路選択等をねらいに編成され、「進路の学習」「現場実習」「進路相談」に分けて実践されている。学年ごとの生徒の成長段階に合わせ、1年生を「進路学習導入期」、2年生を「自己適性探索期」、3年生を「進路決定期」と位置づけている。

本学には身近な社会資源として大学がある。ここで報告する「一日大学生」は2年生の後半で計画され、大学との連携のもとに平成4年度より行われ、大学での具体的な体験を通して、進学を考えるきっかけにすることをねらいとしている。

本研究では、平成18年度に東京学芸大学特別科学支援講座と東京学芸大学附属特別支援学校との連携で行われた「一日大学生」の授業について紹介し考察することを目的とする。

## 2. 研究の方法と結果

### 2. 1. 対象生徒

東京学芸大学附属特別支援学校 高等部2年生10名（男子5名、女子5名）

知的障害の様相は、重度2名、中度4名、軽度4名である。（全訂版田中ビネー知能検査で、便宜的に重度の範囲をIQ25以下、中度の範囲を26～50、軽度の範囲を51～70とした。）生徒達は、卒業後の進路先を想定した体験として、希望やニーズに応じて居住地域の作業所、企業等で4箇所以上の実習先で現場実習（1箇所の体験期間は2週間である。）を経験している。

### 2. 2. 実施期間

平成19年1月29日～2月5日

大学訪問日 平成19年2月2日「一日大学生」体験

## 2. 3. 授 業

### 2. 3. 1. 授業の計画

#### (1) 指導目標

高等部卒業後の進路に「進学」という進路があることを具体的な体験を通して知る。

#### (2) 大学と連携した授業を実践するにあたって

大学教員と特別支援学校の授業担当者がお互いの授業について意見交換しながら指導計画が作成され実践された。「大学の施設を実際に利用する。」「大学生の実際の授業に参加する」「大学生との交流の授業を計画する。」など活動で構成することにした。

#### (3) 授業の計画

### 2. 3. 2. 授業の実際

#### (1) 事前学習

##### ① 事前アンケートの記入。

##### ② ビデオレターを使ったガイダンス

前年度に行われた「一日大学生」のビデオを見て、学習内容の見通しを持たせた。その後、大学の教員と学生が作成したビデオレターを見て学習した。ビデオレターでは、大学の教員や学生の自己紹介と授業の様子が生徒に伝えられた。

##### ③ 発表文の作成

交流の授業での発表文を、「これからの私たち」という題目で、平成18年度秋期に体験した現場実習紹介を中心に作成した。“名前”“現場実習先の名前”“今、大好きなことや夢、進路希望（これからの私たち）”をワークシートに書き入れた。現場実習時の画像などを見ながら自己紹介文を作成する生徒もいた。その後発表の練習を行った。

#### (2) 大学訪問当日の授業

実際の学習の様子を（図-1）に記す。学習の実際は大学生の感想文の内容も含む。

| 学習内容  | 学習の実際   |
|---|---|
| 1) 施設の見学<br>①研究室<br>②研究棟<br>③講義棟<br>④施設見学、他 | <p>①奥住准教授、伊藤教授の研究室に訪問した。大学の先生は一人につき一つの研究室を持ち、たくさんの日本語や英語の専門書があることを知る。大学の先生は、大学生・大学院生に教えたり、いろいろと調べて発表する研究という仕事をしていることを知る。【写真-1】</p> <p>②大学の広いキャンパスにある各施設（陸上、球技場、野球場、サークルの施設、体育館、農場）を歩いて見学した。大学が広いことを知り、たくさんの学生がいることを知った。<br/>           【写真-2】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>【写真-1】 研究室を訪問する</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>【写真-2】 施設・グランドの見学</p> </div> </div> |

|  |   |
|--|---|
| <p>2) 施設の利用</p> <p>①大学生協で食事</p> <p>②大学生協で買い物</p>   | <p>①体育館のように広い食堂部を利用する。たくさんの献立の見本から食べ物を選び注文し、財布からお金を出して精算した。大学生の間で食事をした。自分で選んだ献立に満足気であった。<br/>【写真—3】</p> <p>②大学生協で大学の名前の入った透明ファイルを購入した。 【写真—4】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">【写真—3】 昼 食</p> <p style="text-align: center;">【写真—4】 買い物</p> |
| <p>3) 授業の参加</p> <p>①授業の聴講</p>  | <p>① 障害児教員養成課程 言語障害教育専攻の「言語障害心理学Ⅱ」（伊藤友彦教授）の授業を聴講する。大学の授業は初めての体験である。講義は「脳の仕組み」などの内容であったが、一言も聞き漏らすまいと生徒達は真剣に話を聞いていた。感想を尋ねられ、「“難しい” と思いました。」と答えたり、自分の言葉で授業の内容を説明しようとする生徒もいた。はじめての大学の授業の参加は生徒の興味をかきたてた。</p> <div style="text-align: right;">  </div> <p style="text-align: right;">【写真—5】 大学生の授業に参加</p>  |
| <p>4) 交流の授業</p> <p>①挨拶</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員</li> <li>・高校生</li> <li>・大学生</li> </ul> <p>②発表</p> <p>「これからの私たち」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校生</li> <li>・大学生</li> </ul> | <p>4) 養護学校教育専攻の「障害児心理学Ⅱ」（奥住秀之准教授）の授業（60人ほどの大学生が出席していた。）に参加する。</p> <p>①教員の挨拶が終わると代表の生徒が挨拶をした。60人ほどの大学生を前に、代表の生徒が挨拶をする。大学生からは二人の代表が出て、高校生の興味を引き出すようなやりとりがあり、大学生の普段の生活や勉強の紹介があった。生徒達は大学生との楽しい雰囲気の中で、話を聞くことに集中していた。</p> <p>②高校生は用意してきた自己紹介・発表文を使い「これからの私たち」の発表を行った。自分が経験してきた現場実習の発表を堂々と発表した。教員とともに発表する生徒もいた。大学生は高校生の現場実習での真剣な取り組みや将来の進路についての希望や考えの発表に聞き入っていた。それまでの和やかな笑いのある雰囲気から、真剣な雰囲気になっていた。</p> <p>大学生からは、卒業後に教員を目指している学生を代表して、教員になるまでの教育実習や</p>                                       |

|                        |   |
|------------------------|---|
| <p>③質疑応答</p>           | <p>教員試験などの説明があり、現在どの学校の教員になるか迷っているなど心境の話もされた。また、大学4年生で養護学校の教員に内定が決まっている学生からは、職場が決まり、これからの心意気などの話があった。</p> <p>③高校生が事前に用意した質問を一人ずつ行い、大学生が答えた。「楽しいことは何ですか？ 作業はありますか？ クラブはありますか？ やさしい勉強はありますか？ 試験はありますか？ 親から離れて大変なことは？ 大学でお金は掛かりますか？」など、自分の聞きたい事を質問した。大学生からも、趣味や大学を見学した感想についての質問があり高校生が答えた。<br/>【写真—6】</p>                              |
| <p>④記念撮影<br/>(全員で)</p> | <p>④記念撮影では、大学生に混ざって写真に写る生徒もいた。(【写真—7】</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>【写真—6】自分の将来について発表する      【写真—7】大学生と集合写真の撮影</p> |
| <p>⑤挨拶</p>             | <p>交流の授業は終始和やかな雰囲気で行われたが、大学生、高校生双方がお互いをもっと知りたいという真剣な様子が伝わってきた時間であった。</p>  |

(図—1) 「一日大学生」学習の実際

(3) 事後学習

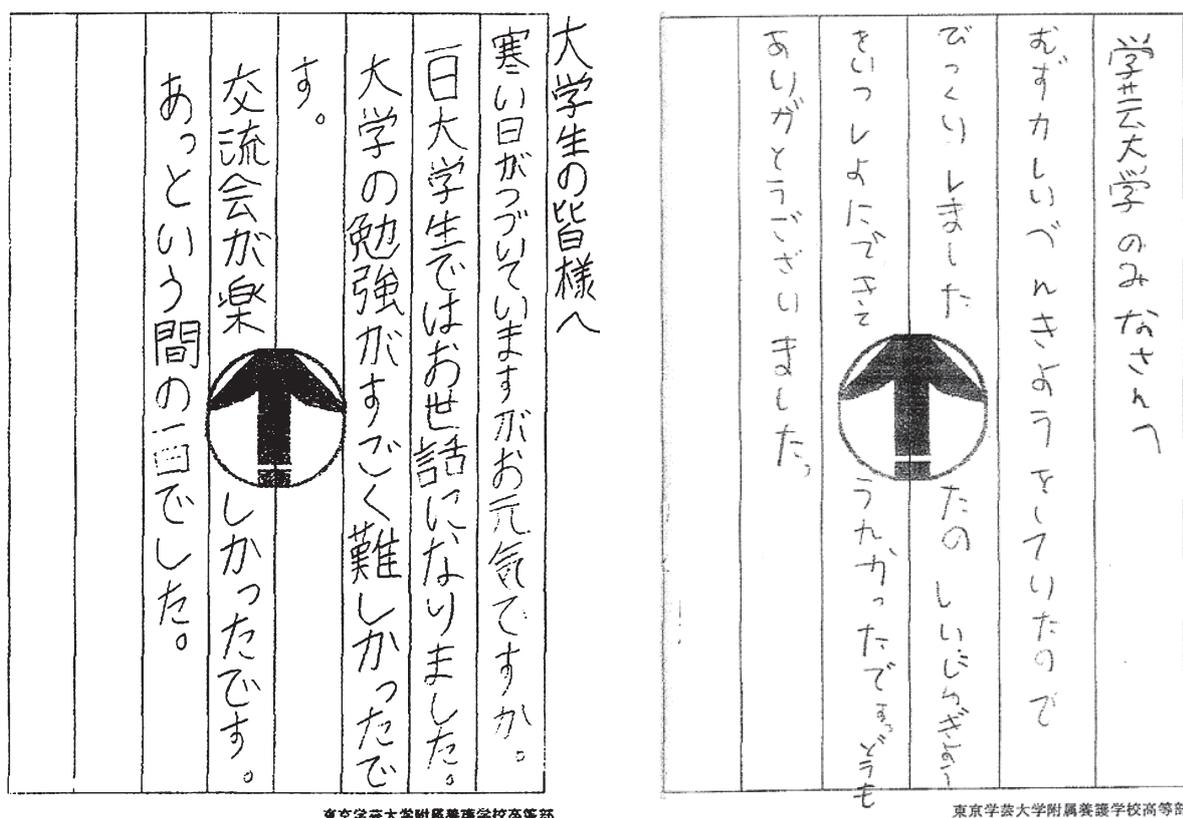
- ① 事後アンケートの記入 (\*事前のアンケートと同様の内容で行った。)
- ② 大学の感想文 (図—2) を書いた。

|  |
|--|
| <p>生徒A：大学生がたくさんいました。のうのべんきょうをしていました。いろいろなべんきょうをおそわりました。だいがくにいきたいです。たくさんべんきょうをやります。</p> <p>生徒B：おくずみ先生のけんきゅうしつをみてほんがいっぱいあってびっくりしました。いとうきょうじゅのじゅぎょうはむずかしいべんきょうをしていました。大学はひろくてきょうしつがいっぱいあてびっくりした。</p> <p>生徒C：ぼくは大学でわかったことは、大学は、とこ屋があることがわかりました。あと剣道があることがわかりました。</p> <p>生徒D：始めて見学(大学)を見ました。大学生と交流会と授業に出席するためと体育館の見学を見ました。体育館と正門が広がったです。授業に出席するが少し難しかったけど簡単でした。私は東京学芸大学に行くのは始めてです。</p> <p>生徒E：奥住先生の研究室に行って見学をしました。大学生と食事を食べました。美味しかったです。教室に行ったり体育館に行ったりグラウンドに行ったり案内してくれました。伊藤教授と一緒に授業したりしました。高校生の私たちこれからの私達を言いました。交流会をしたりしました。最後に写真撮影もした。終わりの挨拶をして終わりました。楽しかったです。</p> |
|--|

(図—2) 生徒の大学の感想

③大学生に手紙を書く。

ビデオで学習を振り返って、高等部卒業後の進路や大学生への手紙を書いた。(図-3)



(図-3) 生徒が大学生に書いた手紙

2. 4. 事前・事後のアンケート調査

2. 4. 1. アンケートの内容

生徒に事前と事後にアンケートによる聞き取り調査を行った(巻末 資料参照)。①事前調査は、平成19年1月22日、②事後調査は、平成19年2月5日に行った。アンケートの内容は、①大学に行く目的 ②大学にある物、③大学の生活、④大学の授業、⑤大学への進学希望、等の項目で調査し、高校生に理解できるように簡単な文章や問いかけで行われた。

2. 4. 2. アンケート調査の結果

① 大学に行く目的

「(1) 大学は何をしに行く所ですか」の質問で、大学に行く目的を尋ねた。一人が複数の回答をしてもよいという条件で実施した。

事前の質問では「大学は勉強、研究、仕事をす」所というイメージを持っていたが、事後の質問では「勉強」が一つ減り「遊ぶ所」という回答が増えた。(図4参照)

② 大学での生活

「(3) 大学では何ができると思いますか」の質問で大学での生活について尋ねた。一人が複数の回

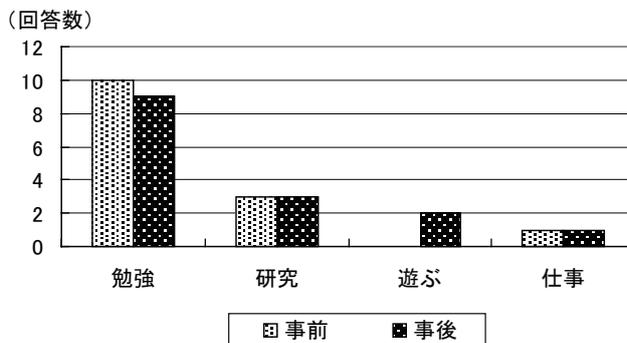


図4 大学は何をしに行く所ですか (回答数)

答をしてもよいという条件で実施した。事前の質問では「食事、勉強、就職の勉強、遊び、スポーツ、買い物」というイメージを持っていたが、事後の質問では「勉強ができる、スポーツができる」という回答が増えた。(図5参照)

### ③ 大学の授業

「(4) 大学の授業はどんな授業だと思いますか。」と質問し、三択の答えを二種類用意した。「簡単、難しい、どちらでもない」の三択で授業の難しさを選べるように尋ね、「楽しい、つまらない、どちらでもない」から選べるようにした。前者については、事前の質問で「難しい、どちらとも言えない。」という回答があり、実際に経験してみないと「どちらとも言えない。」ということであった。事後の質問は、「簡単」という回答が加わった。

(図6) 後者の質問については、事前の質問で「実際に経験してみないとどちらとも言えない。」という回答であった。事後の質問には「楽しい」という回答が増えた。(図7)

### ④ 進学希望

「(5) 大学に行きたいですか。」の質問では、事前の質問には「わからない」という回答が見られたが、事後の質問では、「大学に行きたい」という回答が事前の2人から5人に増え、「どちらでもない。」という回答が一人になった。(図8) また、進学希望の理由について生徒達に尋ねると以下の理由があげられた。

(行きたい理由)

「大学にサークル活動や友達(作ったり)勉強がしたいから」「勉強はたいへんだけど大学に行きたい。」

(行きたくない)「入学試験に100万円かかる。」「お金がかかるからです。」

(わからない)「勉強がむずかしそうでした。」

## 3. 考察

### 3. 1. 大学についての生徒の認識

授業前に生徒達は“大学”のことについて尋ねると、「(自分の)お姉さんが行っている所」「大学生が行く所」「勉強をする所」と話していた。周囲の人やテレビなどから聞いた知識であった。事前アンケートからも「大学は勉強する所だと思う。勉強は難しいと思う。」「大学のことはもわからない。」という生徒の状態がわか

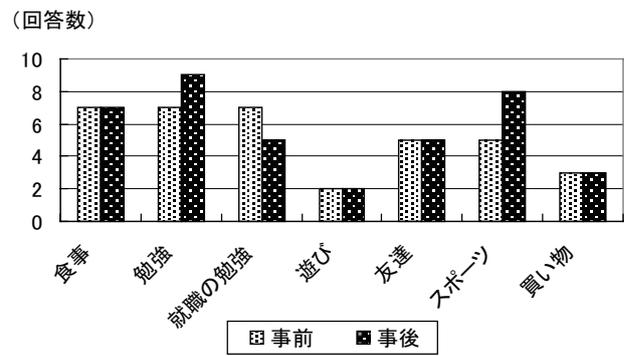


図5 大学では何ができますか (回答数)

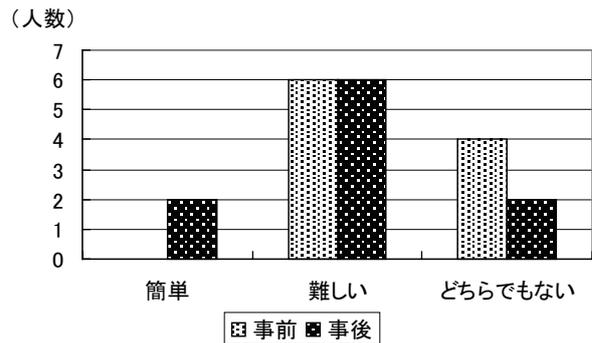


図6 「大学の授業は簡単ですか? 難しいですか?」

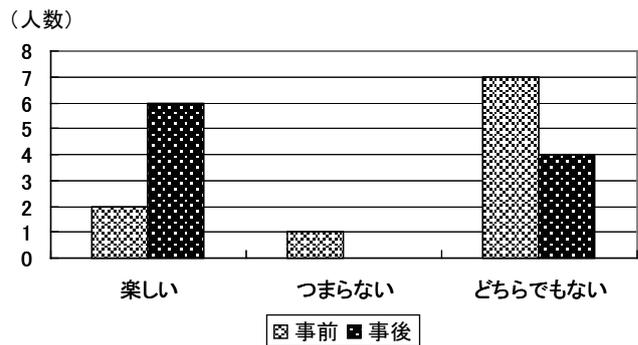


図7 「大学の授業は楽しいですか? つまらないですか?」

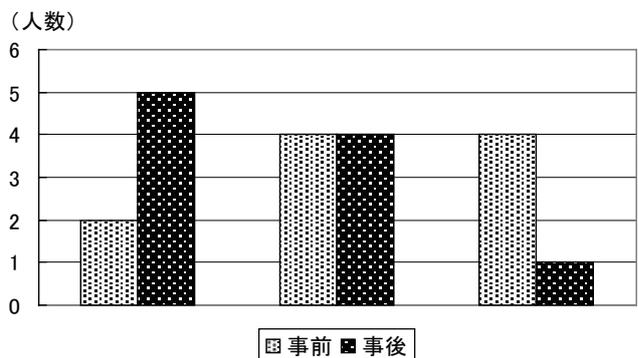


図8 「大学に行きたいですか」

る。生徒たちは大学を見学し、授業を体験できる「一日大学生」の当日をとっても楽しみにしていた。「大学で作業の時間はあるのかな。」「お金はいくらかかるのかな。」と大学生への質問がたくさん出てきた。質問を紙面に書いたり、発表文を作成したりと、事前の活動に積極的に取り組んだ。「一日大学生」の大学体験に対する期待が感じられた。

体験を終え、生徒達は大学についてのいろいろな感想や説明を言葉にした。「大学の先生は“総合学習”のような研究の仕事をしている。」「研究室には本がたくさんあった。」「大学生は先生になるための勉強をしている。」「作業や仕事（職業訓練）の勉強はしていない。」「家族から離れて生活をしている。」「アルバイトでお金（生活費）を稼いでいる。」「お金（学費）が高い。」等々、大学での体験は彼らにたくさんの大学についての情報を与え、認識を広げることになった。事後アンケートからは、「大学は勉強に行く所だけれど、大学生と遊べそうだ。」「勉強は考えていた以上にたくさんあるけれど、スポーツができそうだ。」「大学の授業は考えていたほど難しくない。」「大学の授業は楽しそうだ。」など、生徒の認識の様子がわかる。

聞いていただけの“大学”から、自分で直接感じた、理解した“大学”となった。

### 3. 1. 2. 高等部生徒の進路選択と進学

事後アンケートで「大学に行きたいですか」の質問に対して「大学に行きたい」と答えた生徒が増えた。本授業の体験で大学や大学生に好印象を持ったためと考える。反面、「大学に行きたくない。」と答えている生徒の数もかわらなかった。「どちらでもない。」と事前のアンケートであいまいに答えていた生徒の数が減った。本授業の体験は大学についての意思表示をはっきりさせた。

体験から2ヶ月後に生徒は高校3年生になった。3年生は卒業後の進路を決める大切な一年となり、進路を真剣に考える。高校の現場実習で経験してきた作業所や企業での取り組みを振り返り、また、「一日大学生」の体験を振り返りながら進路の希望を出していく。4月当初に進路希望調査を行うと、就職希望者が9人、進学希望が1人になった。大学での体験は「楽しかった」という体験だけではなく、大学が自分にあるかという判断、選択もさせた。一日大学生の授業の感動から時間が過ぎ、高校生で経験してきたことを振り返る時間を経て、生徒一人一人が自分の進路希望を出してきた。

就職希望の9人には就職に向けての進路相談を進め、進学希望の1人には進学に向けた進路相談も進めた。

### 3. 1. 3. 進学と卒業後の希望

進学希望の生徒には、「一日大学生」の授業後に障害者を対象にした職業訓練校などの見学を行った。進路相談では、職業訓練校などの見学後に進路先の希望を尋ねていくという展開で行われた。本人の希望を文章や文字で置き換えながら進路相談を進めていくと、最初進学の希望理由が漠然としていたが、はっきりしてきた。本人は、「卒業後も勉強したい。友達が欲しい。スポーツをしたい。」という希望を卒業後の生活に持っており、就職するとその希望がかなわないという理由から進学を希望していたのであった。その後の進路相談では、就職情報や余暇の活用についての情報も提示しながら進めた。

## 4. まとめと今後の課題

### 4. 1. まとめ

特別支援学校高校部卒業後の進路には“就職（働く）”と“進学（勉強する）”という選択がある。進路を選択する際は言葉や文字による情報から判断するが、特別支援学校の生徒の進路選択では、実際の経験が必要になる。体験して感じてはじめて生徒達は判断できる。“就職（働く）”の手がかりは現場実習（事業所での仕事の体験）での経験にある。現場実習の作業所や企業ではどんな仕事をして、何を感じてきたのか、何を目標にがんばって、ほめられたのか、注意されたのかという体験である。

“進学（勉強する）”の手がかりについても同じことが言える。生徒達は、大学での直接体験から、感じたこ

と、理解できたことをから進学について考えた。3年時の進路希望調査で就職希望が9人、進学希望が1人になったのは、大学の体験で得た理解と自分の適性を考えたうえで出した判断、結果であった。

生徒自身が進路選択をしていくためにも、大学と連携した「一日大学生」体験は貴重な学習活動である。

全国の特別支援学校の高等部では、本校と同様に、現場実習（産業現場等における実習、インターンシップ）を行っている。しかし、進学という体験を用意している学校は少ない。本学の「一日大学生」の授業実践を紹介できたらと考える。

最後に、現在の教育制度上、知的障害特別支援学校の生徒が大学に進学するには、高等学校卒業程度認定試験と、大学の入学試験のそれぞれを合格しなくてはならない。知的障害特別支援学校の進路相談では、大学を進路の選択肢とすることは薦めるケースは少ない。しかし、最近、障害者を対象にした大学公開講座、オープンカレッジなどの活動が全校的に見られるようになってきている。「卒業後も勉強したい。」といった希望を持つ生徒や卒業生には、大学公開講座、オープンカレッジなどの体験を薦めたい。

一日大学生の体験をとおして、生徒達は進路に対する意向や希望を明確に出すようになってくる。生徒の希望やニーズを将来の進路先や生活につなげ、実現させていくためにも、今後さらに大学と連携しながら「一日大学生」体験の学習を発展させていくことが望まれる。

## 5. 補 論

ここまでは、附属特別支援学校の高等部教育の視点から、「一日大学生」の取り組みについてまとめてきた。以下には、教員養成の一環としての「一日大学生」の意義についてまとめてみたい。

「一日大学生」を行なった科目は「障害児心理学Ⅱ」（担当：奥住秀之）である。平成19年度より本学では新カリキュラムが立ち上がっているため、この科目は、平成18年度入学生以前が受講する、いわゆる旧カリキュラムにある講義である。

養護学校教育専攻の必修科目で、標準開設学期はⅣ期（2年生後期）、旧養護学校教諭一種免許状の「心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目」の一つに認定されている。参考までに平成19年度受講生の人数を紹介すると、約70名で、うち3/4程度を2年生が占める。つまり、履修学生の特徴は、養護学校教育専攻あるいは他専攻で養護学校（特別支援学校）免許取得を希望する者がほとんどであり、学年で見れば、障害児教育の学習を始めてやっと一歩が踏み出された段階にあるといえるだろう。なお、この中のおよそ40名が、附属特別支援学校で4年次に教育実習を行なう（教育実習の担当教員も同じ奥住であることも「一日大学生」を行なううえで都合が良いと思われる）。

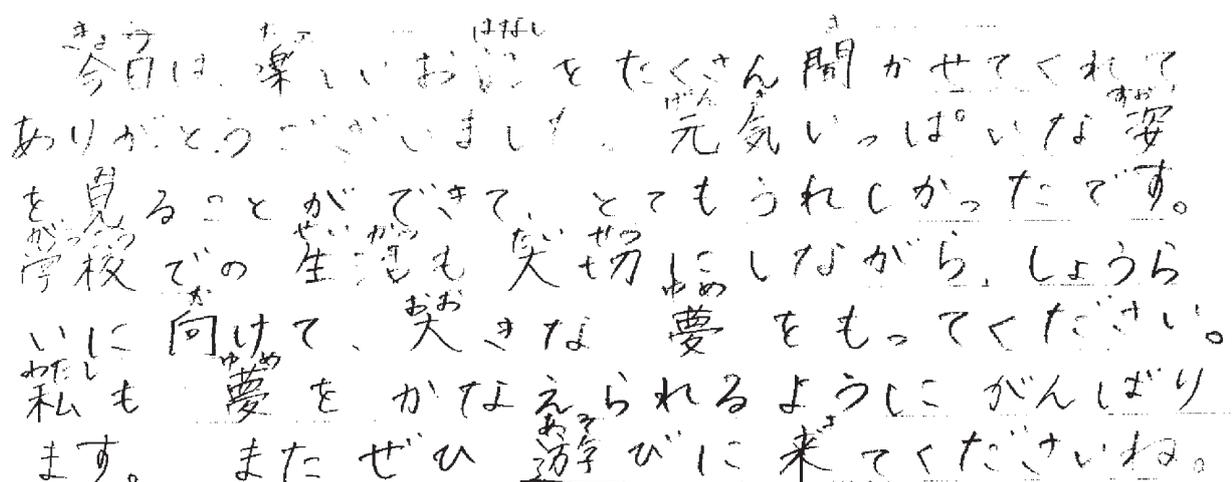
本学は、アドミッションポリシーにもあるように「高度な専門性と優れた実践力」を兼ね備えた教員を養成することを目指している。しかしながら、通常のカリキュラム内での講義の多くは、「座学」による理論学習が中心となってしまう、障害のある児童・生徒と直接関わりながら身につける「実践力」と結びつく時間を持ちにくいのが現実である。附属特別支援学校を活用した大学教育も今後ますます豊かにしていかなければならないのだが、距離的に大学と附属特別支援学校は遠い位置関係にあり（公共交通機関を使って少なくとも1時間程度はかかり、通常の授業時間で学校訪問するということは、往復の時間だけを考えてもほぼ壊滅的である）。

大学教育の視点から見た「一日大学生」には、附属特別支援学校と学生との距離を縮めること、そして、高校生と大学生という違いこそあれども、同じ青年期をともに生きるなかまとして交流しあうという意義を有していると思う。大学生は、生徒に直接に質問等かわしながら、知的障害のある高校生の現在の学習や生活を知り、そして、卒業後の生活、労働、余暇についてのねがいを知る。同じ仲間という視点で関わったこの体験は、やがて数年後に彼らが特別支援学校教員となるうえで、きわめて貴重な経験になるに違いない。

「一日大学生」当日は、数名の学生に、事前に開会のことは、大学生活と将来の夢の発表などいくつかの役

割を与えたが、実際は、彼ら以外の学生による自発的、積極的な発言が目についた。特別支援学校教師になりたいという力強い意思を学生諸君から感じとった時間であった。

授業終了後、学生は、附属特別支援学校の引率教員と参加高校生に手紙を書いた。その中から、高校生に向けた手紙の一つを掲載したいと思う（図9）。学生諸君が改めて特別支援教育教員になりたいと思った瞬間だと確信する。こうした授業ができるのは、附属の特別支援養護学校を有している教員養成系大学ならではのことだろう。来年度、カリキュラムが変わるため「障害児心理学Ⅱ」の講義は開設されないが、別の形で更に発展させたい。



今日は、楽しいお話をたくさん聞かせてくれて、  
ありがとうございます。元気いっぱいいな夢  
を見ることができて、とてもうれしかったです。  
学校での生活も大げんかにしながら、しょうら  
いに向けて、大きな夢をもってください。  
私も夢をかなえられるようにがんばり  
ます。またぜひ遊びに来てくださいね。

（図-9）大学生の高校生に向けた手紙の一例

## 6. 参考文献

- 1) 自分の将来を考える進路学習. 東京学芸大学附属養護学校研究紀要. VOL.42. 1997. 175-226.
- 2) 松矢勝宏監修: 大学で学ぶ知的障害者-大学公開講座の試み. 大揚社.
- 3) 自分を知り社会を学ぶ受講生論文刊行委員会 (2004): 東京学芸大学公開講座「大学へ行こう!!」ゆじゅんと.
- 4) 松矢勝宏監修 (2004): 主体性を支える個別の移行支援. 大揚社. 82-92.
- 5) 自大学と連携した授業~高等部・進路学習「一日大学生」~東京学芸大学附属養護学校研究紀要. VOL.42. 1997. 175-226.